

平成30年5月6日(日)

老球の細道410号

二刀流と二足のわらじ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

大リーグのロサンゼルス・エンゼルスに移籍した大谷翔平選手が、移籍前の予想を翻して大活躍を見せている。打者としてはホームランを3試合連続で打ったり、投手としては時速165kmの超速球で、あわや完全試合かという快挙である。アメリカでは、あの伝説のベーブルースの再来かともてはやされているようだ。日本の高校野球であれば、ピッチャーで4番打者ということは普通にあるが、プロ野球では大谷選手が現れるまで聞いたことがない。このまま二刀流でアメリカ大リーグ界を席卷できるのだろうか。

二刀流に関しては色々な批判も出ているようだ。特にプロ野球のご意見番である広岡達朗氏(元監督)は三つの批判をあげている。一つは、当番日以外の日が犠牲になり、投手としての調整や課題克服の練習がおろそかになる。二つは、打って走ってスライディングしたら怪我の危険性に見舞われる。三つは、100年に1人の投手。スタイルも顔もいい。だからこそ才能のむだ使いが歯がゆい。結論は、投手に専念すべきだということだった。

「二刀流」とはそもそも剣豪宮本武蔵が完成させた二天一流という兵法で、右手に大太刀、左手に小太刀と、2本の刀を持って戦う剣術がルーツである。同じ職業、同じスポーツでも二つの能力を持つことをいう。バスケットボールでは、ポイントガードもセンターもできる人だろうか。

同じような意味合いで使われるのに「二足のわらじ」がある。私が教員チームの現役選手だった頃、先輩の先生によく言われていたのは「われわれ教員チームは三足のわらじをはかなければならない」。選手として活躍するだけでなく、コーチとして教え子たちを指導をし、審判として大会の運営にも協力する。どれも手抜きしないでやる。

そもそも「二足のわらじ」とは、江戸時代のバクチ打ちがバクチ打ちの取り締まりも両方やっていたことに由来する。相反するような仕事を両方やっていることから、違う職業、違うことなどを二つ掛け持ちでやることに使われている。

スポーツの世界では、二足のわらじをはく選手も多い。最近では、平昌冬季五輪でスーパー大回転とスノーボードパラレル大回転で金メダルを獲得したチェコのエステル・レデツカ選手。ちょっと前だと、スケートと自転車で五輪に出場した橋本聖子(現国会議員)、バスケットボールだと野球にも挑戦したマイケル・ジョーダン。アマチュアやプロのマイナー選手などは仕事と選手、学生は勉強とアルバイトなどと二足のわらじをはくことはかなり多い。力と時間の分散がデメリットになるが、やれないことはない。

二刀流にしても二足のわらじにしても、問題になるのはいかに両立させるか。「一芸に秀でる者は多芸に秀でる」と言われるように、一流アスリートは、①真面目で、勤勉、努力家、情熱がある②集中力があり、継続することを困難に思わない③自己管理、時間管理に秀でて、常に次のことを考えながら目の前の仕事に全力を尽くす特性を持つ。

一つのことにとことん打ち込んで得たスキルは他のことでも十分利用、応用できる。両立は、バスケットボール選手、コーチの宿命でもある。学業との両立、コーチは仕事、家庭との両立がある。色々なことを両立させながら人生を楽しみたいものである。

蛇足であるが、コーヒーもブラック、砂糖入り、ミルク入りと三刀流で楽しんでいる。